

読む湘南

～少しだけためになる海の話～

vol.4
2012.3

オレたち子供の頃、
砂浜ってもと
広かったよな?」

答えは
「はい、その通り」。

「砂代」年間2億円。

砂浜を守るために
使われる税金額。
高いと思いますか?
安いと思いますか?



湘南の豊かな砂浜が今、消えかけている。原因を作ったのは、私たち人間。砂浜と相模川の関係、砂を守る手段、防災上の砂浜、生態系にとつての砂浜。実は凄く大切な話です。

——湘南ビジョン研究会代表 片山 清宏



私たち「湘南ビジョン研究会」は毎月1回、「湘南の海を考えるミニフォーラム」を開催しています。「読む湘南」ではフォーラムの内容を毎回フォローしていきます。

講師 神奈川県藤沢土木事務所なぎさ港湾課長

細川 順一氏

■砂浜減少の現状と課題

細川 藤沢土木事務所なぎさ港湾課長の細川です。本日の内容は1番目に湘南の海岸侵食の現状と課題、そして2番目に神奈川県の侵食への取り組み、3番目に具体例として、茅ヶ崎の中海岸地区の侵食対策の事例をご紹介したいと思います。

まず、侵食の現状と課題です。湘南海岸の砂浜は、ここ50~60年で大きく様変わりしました。端的に言って、砂浜が細くなってしまった。最も被害が深刻なのが茅ヶ崎の中海岸です。茅ヶ崎球場の辺りですね。数字で示すと、約45㍍水際線が後退しています。この地域に砂を供給するのが相模川なのですが、流れ出た砂は東へ東へ、江の島方面へ流れます。それが茅ヶ崎漁港である程度せき止められてしまったため、そのまま東側の中海岸に砂がつかない。一方で漁港の西側、相模川寄りは砂が堆積して砂浜が膨らんでいます。また、中海岸近辺から流れ出た砂は再び東へ流されますので、江の島寄りの片瀬海岸西浜などは30㍍ほど砂浜が前に出てきています。

中海岸の砂浜は一時期ほぼ完全に消失しました。こうなると波が直接サイクリングロードなどの背後地に打ち上がり、特に台風の時などは被害が出やすくなります。場合によっては宅地にまで被害が及ぶこともあります。

なぜこのような状況になってしまったのか。漁港などの沿岸の構造物が砂の流れを阻害しているのは確かですが、それは局所的な話です。根本的には先ほど申しましたように、湘南海岸に砂を供給するのは相模川です。私たちは生活する上で水や電気を必要とします。河川の氾濫も防がなければなりません。その結果、相模川にはダムができ、流域は護岸で固められました。そして高度経済成長期の建築ラッシュにともない、相模川から約2200万立方㍍の砂利が採取されてしまいました。川にまだ体力があ

高度経済成長期、相模川から150年分の土砂が持ち去られた



った昭和30年代は相模川から年間15万立方㍍の砂が海に供給されていましたので、約150年分の砂が持ち去られることになります。こうしたことが原因で砂の供給が大幅に減少しました。そして現在は年間5000立方㍍しか出できません。弱ってしまった砂の流れをいかに取り戻すかが課題です。

ではその課題に対し神奈川県はどのような対策を取っているのか。長期的には山、川、海、つまり川の上流から下流、そして海への砂の流れ、これを流砂系と呼びますが、この流砂系の健全化を図らなければなりません。ダムや護岸にも意義がありますので、どのように折り合いをつけるかは難しいですが、現実、砂の流れは止まっています。従って、まずは人工的に砂を持ってこようという取り組みをしています。ダムのある相模湖から砂を採取し、運んでいます。

中海岸の対策事例を具体的に紹介します。相模湖の底にたまたま砂を浚渫（しゅんせつ）し、いったん仮置きして水切りします。それをダンプで運搬し、中海岸の護岸に張り付けます。張り付けた砂は波の力で自然に左右に運ばれる、という想定です。まず2006年に試験的に1万立方㍍入れて、我々が目指す通りになるか実験しました。その成績がかなり良かったので、それから毎年3万立方㍍ずつ砂をいれています。10年で計30万立方㍍の砂を入れ、浜の幅を50㍍まで回復させようと計画しています。徐々に砂浜が前へ出てきており、今のところうまくいっているようです。



崖のようになっているのが養浜によって張り付けられた砂

2012年2月22日

第4回テーマ

湘南の海岸侵食は止められるか？

■パネルディスカッション

片山 それではパネルディスカッションに移りたいと思います。細川さんにご説明いただいた現状を踏まえ、どういった対策が取れるのかを議論していきます。まず塩入さんと伏見さんに、自己紹介を兼ねて簡単にお話をいただければと思います。

講師 海洋政策
研究財団研究員

塩入 同氏

塩入 ご紹介いただきました海洋政策研究財団の研究員の塩入と申します。海洋政策研究財団というは、海に対する政策の研究をして厳しい提言を国の方に出していく、ということをやっています。砂浜の減少に関して言えば、茅ヶ崎に限らず日本全国でこの問題があるにもかかわらず、抜本的な対策が取られていないのが現状です。

伏見 「ほのぼのビーチ茅ヶ崎」で海岸環境部の部会長として活動しております伏見です。僕らは専門家ではなく、一般市民団体です。ほのぼのビーチ茅ヶ崎は茅ヶ崎海岸を中心に、誰でも気軽に安心して利用できる海岸、きれいな海岸を世代を超えて残したいという目的で行動しています。毎月のビーチクリーンと環境イベントとしてビーチフェスティバル、そして市民と行政との勉強会としてのシンポジウムを毎年開催しています。活動の拠点が一中（茅ヶ崎第一中学）下のヘッドランド（砂の流出を防ぐための人工岬）です。養浜を目的にコンクリートのものが1990年にできたんですが、それは砂が増えるわけでも太るわけでもなく、周辺の砂を吸着させるだけのものです。細川さんが茅ヶ崎漁港の東西の砂の「多い、少ない」のお話をされました。こうした構造物は砂の不均衡という弊害を起こしてしまう。またヘッドランドはコンクリート製なので死亡事故が多くて、このようなものが養浜目的で次々とできてしまうのは非常に困るという思いがあります。

私は茅ヶ崎市で30年ほど前からサーフショップを経営していて、私がサーフィンを始めたばかりの頃の茅ヶ崎海岸は本当に砂浜が豊富でした。急激に侵食が進んでしまった海岸を自分が知っている元の姿にして、次世代に渡したいと考えています。

片山 では具体的な議論に入っていきたいと思います。まず砂浜の侵食問題が脚光を浴びるようになった経緯を塩入さんにご説明いただきます。

塩入 私は元々行政の側から海を見てきて、今は市民の立場で砂浜を見ています。そこで感じたことは、砂浜を継承していく原動力は技術や予算ではなく「人の思い」だということです。その土地土地には固有の海、砂浜に対する考え方があります。それを理解していない政策には

相模湖で採取した土砂を中海岸へ運搬「養浜

やはり反対運動が起きます。かつて相模川河口に湘南新港という博多港くらいの大きな港をドーンと作ってしまおうという動きがありました。これへの反対運動。昭和40年代には河川砂利の採取を禁止しようという運動もありました。そして茅ヶ崎中海岸にレンズ礁という突堤というか施設を作ろうということに対し、今日お越しの「ほのぼのビーチ茅ヶ崎」の方々から「砂で守れるものは砂で守ってほしい」と。ただそれまでの反対運動は住民対行政という構図だったのに対し、ほのぼのビーチさんは協議会を作り、行政も一緒にやっていくというスタンスでした。こうしたやり方いいよね、協議会を開いてみんなで考えようよ、ということで九十九里などに波及しています。

片山 伏見さんは20年も前からこの問題に取り組んでこられました。

伏見 当初は中海岸の砂浜がなくなってしまった、どうしようかという集まりでした。協議会として話していく中で、海岸法では砂浜防護、国土保全のために何かを入れるとしたら一時的な予算でドーンと入れないといけないということでした。私たちは砂のことは砂で対処してほしいと言ってきたのですが、それでは予算が落ちない。工法としてコンクリートしか選択肢がないという結論の中で出てきたのがレンズ礁でした。ほのぼのビーチでは勉強した上で提言、提案をして、署名活動でそれをひっくり返したとい

講師 ほのぼのビーチ茅ヶ崎海岸環境部会長
前茅ヶ崎市サーフィン業協同組合理事長

伏見 康博氏

う思いで活動してきました。

細川 伏見さんがおっしゃったように、今まで侵食が現れた部分を埋め込むようにして砂を安定させる、局所的な対策を取ってきました。これはその場所は一時的に良くなるのですが、その隣りからは砂が消えていくという欠点がありました。ではどうすればいいのか、というのを地域の方々や県と話しました。その結果、砂で砂を守ができるという結論に達し、今それを少しづつやっています。

■養浜は半永久的に続けられる？

片山 每年3万立方㍍、ダンプカーで5000台分の砂を毎年1～3月に中海岸に入っています。1年で2億円の税金が投入されていて、それを10年間やるというお話がありました。その間も砂がどんどん流れていってしまうのではないかというところに私は疑問を感じています。お金を捨てている、流しているようなものではないですか？

細川 砂を入れれば、その瞬間に砂浜があるよう見えるけれど、台風のたびにどんどん流されてお金を使っても元の木阿弥になるのでは？という不安は確かにありました。しかし、砂浜には安定勾配というのがあって、その勾配を



ヘッドランドの功罪

守りながら少しずつ前へ出していけば、よほどのことがない限り外へは出でていかない。そして出ていったとしてもその砂粒には移動限界水深というのがあることが分かってきました。その水深が茅ヶ崎では9~10㍍。それより先に行くと砂は動かないんです。台風で砂が流れて一瞬なくなつたように見えて、沖の海底にこんもりたまっている。それが静穏時には徐々に元に戻ってくることが分かって、これはドブに捨てる事にはならない、と。試験養浜をやってみたところ、確かにそこに砂が居ついてくれることが分かったので、現在はこの工法を採用しているのです。10年経って40~50㍍の砂浜ができたとき、今度は横の連携を実践していきます。横に砂を回していくれば、経費をグッと下げる事ができるのではないかと思っています。

片山 なるほど。ありがとうございます。次に茅ヶ崎のヘッドランドについてうかがいます。侵食を防ぐために作られたものですが、実はヘッドランドの近くには砂がついたけれど、砂が集められた結果、周辺の侵食は進んでしまったという話があります。有効性という意味で今はどう評価されているのですか？成功だったのか失敗だったのか。

塩入 もし今あれをパッと取っ払ってしまったら、周辺の砂が一気に江の島方面に行ってしまう。ヘッドランドはそれをマイルドに抑えているという状況にあると思います。確かに利用する上でコンクリートブロックは危険な部分も多いですが、現時点では絶対良かった絶対悪かったということは言えないと思います。どかそう、という話は将来もう少し砂浜が安定した段階で考えるべきでしょう。

伏見 お金絡みなんすけれど、ある構造物が作られるということは必ずその地域の合意形成があつて初めてできるんですね。そのできてしまったものがいらないということになつても、合意形成の上で地域がほしいと言つたのだから、撤去するには作ったときのお金の半分を市・町がも

う一度払いなさいということなんです。だから作ってしまうと簡単には取っ払えないんです。

細川 砂浜が全然なくなっちゃったとき、特に激しかったのは実は中海岸というより菱沼（中海岸の東側、ヘッドランドから汐見台の付近まで）だったんですよ。今は砂で砂浜を守る这样一个新しい技術が生まれました

けど、当時はその危ないところを何とかして守るんだという局所的なやり方だったので、その中から出てきた新しい工法がヘッドランドだったのです。確かに今、菱沼には砂が付いています。弊害も強く出ていますが。

片山 話題を変えます。相模湖の土砂を浚渫して海岸に持ってくるという現在の養浜の事例をもう少し詳しく話しましょう。

細川 神奈川県が養浜を始めたのは昭和の終わり頃なんですが、その頃は千葉など他県の山砂を切り崩したものを購

波打ち際には確かに玉石が目立つ



入していました。ただみなさんご承知のように、湘南海岸の砂は非常に粒が細かく、小田原の方は青く大きな砂利の海岸ですよね。海岸海岸で砂の形状が違うのですが、当時は一律に入れっていました。やっぱりその土地に合わないものはどうしても不安定で、すぐに流れていってしまう。本来そこにあるべき砂が一番居付く、という原理原則に立ち戻った結果がダムの土砂なんです。

気が付けば玉石だらけ

片山 中海岸に行くと玉石が多いですね？砂浜は戻りつつあるとはいえ、すごく違和感を感じます。

細川 湖底をザバッと浚渫すれば大きなものから小さなものまで全部混じってしまいます。抽出試験をしてできるだけ現地の砂粒に近いものを選ぶんですが、どうしても大きなものが入ってしまう。海岸で小さな砂があつていう間に広がり大きなものが残るのは波の作用で仕がないことです。逆に波が自浄作用であるい掛けているとも言えると思います。大きな石がある程度たまつところでそれを集めて元の湖に返す。ちょっと手間は掛かりますが、それを繰り返して元の海岸の姿に近づけていくという作業を今やっているところです。

片山 伏見さん、市民の立場から行政や研究者を見てきた中で、行政側に要求したいことはありますか？

伏見 行政の方は与えられたテーマを肅々とこなしていくだけで、縦割りの隙間があるんですよ。それを自分たちが見つけて一生懸命しつこく提案して、仲間になって同じ方向を向いてもらえるように、魔法のじゅうたんに乗るような気持ちでお互いに気持ちよくなつて「あそこが目標」というのを作り上げる。そんな感じでいます。

片山 行政に何が足りなくて、市民活動で補っているという事例を具体的にご説明いただけますか？

伏見 例えば今回も砂のことで議論していますが、それは砂の物理的な部分だけなんですよ。防護とか広い方がいいねとか。もっと深掘りすると、砂浜は人間にも生態系にも非常に重要な部分があるので、本当はここに環境を専門にする行政の人もいなくてはいけないんですよ。

片山 確かに今回土木などの話に偏ってしまったかなと思います。伏見さんは長いことこの地域で活動されてきました。地域でできること、地域でやらなければならぬことを、ほのぼのビーチのこれまでの事例紹介を含めてお話いただけますか？

伏見 私たちは毎年シンポジウムを重ねてきて、今年が

行政と対立するのではなく、仲間になる



一部むき出しになつた中海岸の護岸

けど、当時はその危ないところを何とかして守るんだといふ局所的なやり方だったので、その中から出てきた新しい工法がヘッドランドだったのです。確かに今、菱沼には砂が付いています。弊害も強く出ていますが。

片山 話題を変えます。相模湖の土砂を浚渫して海岸に持ってくるという現在の養浜の事例をもう少し詳しく話しましょう。

細川 神奈川県が養浜を始めたのは昭和の終わり頃なんですが、その頃は千葉など他県の山砂を切り崩したもの購

10回目になります。当初は「昔、ウミガメが産卵に戻ってきていた頃の茅ヶ崎海岸を取り戻したい」という思いで署名活動を行いました。10周年のうれしいプレゼントのような感じなんんですけど、昨年、やっとアカウミガメが戻ってきて産卵してくれました。

署名活動は子供たちにもわかりやすくするため「ウミガメが産卵に帰れる広い砂浜を茅ヶ崎に取り戻そう」という簡単な文章にしました。汐見台のなぎさ事務所が藤沢の土木事務所に戻ってしまうという噂があったので、海のそばに残してほしいという署名も同時に行いました。これは県の皆さんも私たちと仲間だよ、というのを表現したくてやったものです。最終的には1万2000通の署名を県庁に提出しました。

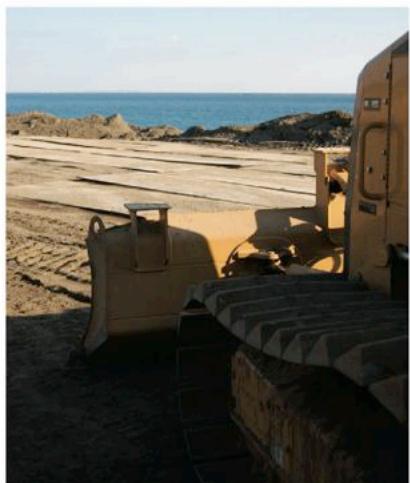
一緒に提出した要望書には、砂浜が遠浅だと台風などの大きな波がきても沖合で碎波して陸地に届くときにはそのエネルギーを失って優しい波になるが、深くなってしまった海岸では急激に強い波が打ち寄せるので、どんなにコンクリートで固めてもダメだよという点。それと砂浜が生態系に与える多大な貢献について記しました。

そのおかげで県知事が現場に視察に来て下さいましたし、市長との意見交換も実現しました。風向きが変わったな、と。レンズ礁から土砂供給へと方針転換されたのも、こうした署名活動、要望書提出の結果だと思っています。また要望書には「山、川、海の連帯」の必要性についても書いてあるのですが、この「山、川、海の連帯」という言葉は私たちが初めて使った言葉です。それが今は行政間で使われています。やってきたことに意味があった、と非常にうれしく思います。

いろいろと良い方向に向かっているのは確かですが、それでもまだ砂の物的面にとらわれすぎているなどとも思っています。最近のオーストラリアの事例を引き合いに説明します。

3年くらい前からオーストラリアは「マリンパーク」というテーマで海岸部をとらえています。私たちはどうも海岸・砂浜の水から上の部分にばかり目がいきがちですが、海の中の生物も海岸も一緒に自然公園の仲間だよ、人間だけでなくその他の生き物すべてが主役だよ、という考えです。リーフは海の生物にとって最も神聖な場所なので、ハイレベルに保護されなければならない。マンガロープは甲殻類や小魚にとって大切な安全地帯だから

茅ヶ崎にウミガメが戻ってきた



養浜のためとはいって、海にブルドーザーは決して似つかわしいものではない

守らなければならない。貝殻すらハチドリやその他の生物に住み処を提供している重要な要素なので、貝の採取も場所を限らなければならない。こうしたことがビーチの立て看板に明記されています。

そしてもう1つ特筆すべきは、サーフィンも含めて保護の対象であることです。レノックスヘッドという大波が立つポイントなんですが、サーフィンができる環境そのものが大事なんだ、だから開発は禁止するとして保護区になっています。砂浜の持つ意味合いを考える上で、耳を傾けるべき部分は多いと思います。

□今後の侵食対策は?

片山 では最後に講師の方からお一言ずついただきたいと思います。今後の侵食対策の決め手、これが一番重要だというのを一言入れてまとめていただければと思います。

細川 我々は地域の方々といろいろな話をしながら、どうやったら海岸を保全していくのかということを常に考えて対策を打っています。すごく息の長い話になると思います。その中で我々は今、小中学生に対して環境教育を、というのを受け入れています。今、湘南の海岸がどうなっているのか、今こういうことをやっていて、将来の目標はこうなんだということを子どもたちに伝えていきます。こういうことをやりながら子どもたちにも砂浜の保全ということを心に留めもらって、一緒に湘南の海を守っていけらいいなあと思っています。

塩入 私は現在、研究職ということで勤めていますが、経済的な合理性ではない視点で、「砂浜って良いから守っていきたいんだよ」という表現しづらいところを裏付けていきたいと思っています。

伏見 地域市民の役目は行政の見落としている部分を見つけること、それを勉強会等でしつこく見せ続けること、敵対しないで仲間にあってもらうことが大事だと思っています。今の子どもたちは現在の海岸の姿しか知りません。過去の良い状態を知っている者には責任があります。良い状況に向かうための仕組みをリレーをすることが大事です。

砂浜は海中で暮らす生き物にとってきれいな水と生育環境を、陸上に暮らす者にとって酸素を供給しています。これらを金額に換算すると、天文学的な仕事を無料で行っています。生態系にとって非常に大事な場所だということを分かってもらいたい。そういう目でみると基本的に砂浜のすべてが保護すべき対象だと思っています。ただ、工業地帯とかいろいろありますから、触れ合うことのできる地域を限定することが本当ではないかと思います。

片山 最後に私から感想として、この海岸侵食の問題は行政とか研究者任せにしてはいけないと感じました。海岸も地域によって、歴史的、地域的、文化的にそれぞれ違うので、自分たちのビーチはヘッドランドが良いのか、税金をかけても自然のままが良いのか、あるいはコンクリートで固めて護岸にするのか。これはやはり地域の人たちが自分たちでそれぞれ決めていくべきことです。行政側、政治側にその意思をしっかり伝えていくことが大切だと感じました。



ビーチバレー元日本代表

海での暮らしを日々楽しむ方々をゲストに招く「海楽（かいらぐ）主義」。3回目はビーチバレーブレイヤーの浜田武仁さん(37)にお話をうかがいました。浜田さんの名刺の肩書は「BeachDreamer」。浜田さんの生い立ちから現在、そしてこれからの夢などを語っていただきました。

浜田武仁さん

「小学校の卒業アルバムに書いた夢は『オリンピックに出ること』。どのスポーツで、とは書いてなかったけど（笑）」

浜田さんは大阪府阿倍野区生まれ。幼稚園の頃、茅ヶ崎に移り住んだ。中学時代にバレーボールを始め、高校では小田原選抜に選ばれたものの1年78というバレーボール選手としては決して高いとは言えない身長がネックとなり、大学からの推薦を得ることはできなかった。

——ビーチバレーを始めたきっかけは？

「水着姿の女の子を見ながらバレーボールができるから（笑）。ビーチバレーっていうのは対戦相手とだけではなく、太陽や風、暑さ、砂など自然とも戦わなくちゃいけないんですよね。身長が低くても、技術と精神力で戦える」

高校卒業後、社会人生活を送りながら本格的に競技を始めた。平塚ビーチパークや鵠沼海岸を拠点に大会に出場。高尾和行氏の指導の下、98年からは日本代表としてワールドツアーに参戦するようになった。

「今でもあの頃いた会社には本当に感謝しています。平日の昼間でもビーチでトレーニングさせてもらっていましたし、海外遠征時は休ませてもらっていましたから。ただ、毎年海外に行くようになると、いい加減にしろ！みたいな空気もありましたけどね（笑）。世界一周のチケットを買って、2カ月くらいヨーロッパを転戦していました。英語が通じない国でホテルの予約がうまくいかず、ペアのパートナーと男2人でスイートルームに泊まっちゃったり。今はいい思い出ですね」

その後、03年にTBS系列のテレビ番組「SASUKE」に出演。06年、アウトリガーカヌーでコナレース（ハワイ）に、08年にはビーチテニスでアジア人では初の世界大会に出場するなど、活躍の場を広げていった。その一方で「選手」としての限界を感じ始めたという。

「いろいろ挑戦したけど、結局オリンピックには出られなかった。小学校の時の夢は果たせませんでした。でも、オリンピックに出るという夢は追い続けたい。今はスポーツ選手をサポートして、その選手がオリンピックに行くのが僕の夢です」

浜田さんは昨年、長年勤務してきた会社を辞め、体のケアの道へと転身した。整体の専門学校で学び、現在は鵠沼海岸の「仁ボディーケア」院長として施術を行っている。

ビーチバレーを始めたきっかけ？水着姿の女の子を見ながらバレーボールができるから（笑）

多くのスポーツ経験を生かし、トレーニングメニューの作成も担う。北京五輪9位のプロビーチバレー選手、朝日健太郎さんをサポートするほか、お世話になっている「整体オアシス相模大野」の紹介で、アテネ五輪金メダリストの水鳥寿思さんや『田中3兄弟』の長男・田中和仁さんらが所属する体操の強豪・徳洲会も「勉強がてら」（浜田さん）支援している。

——最後に湘南の海に対する思いを聞かせて下さい。

「湘南の海は、夏にぎやかで冬はさびしい。でもビーチに行けばいつでも仲間に会える。その空間が一番落ち着きますね。僕も今年38歳になるけど、歳をとってきて海を大切にしようという気持ちが強くなってきた。自分

に求められているのは、レジエンドと呼ばれる湘南の文化を築いてきた年配の方々と10、20代の若い世代をつなげる役割かな。一番大切なのは人と人とのつながりですからね」



◆支援 浜田さんは東日本大震災で活動休止を余儀なくされた東北のビーチバレー選手のサポートも熱心に行ってます。「東北ビーチバリヤーズ応援プロジェクト」の実行副委員長として全国各地のビーチバレークラブに声を掛け、義援金を集めています。集まったお金は津波で流されてしまったビーチバレー用具の購入に充てられる予定です。

様々な競技経験からも分かる通り、浜田さんはとにかく好奇心旺盛。また自宅を「居酒屋ハマハマ」と名付けて、ビーチ仲間や友人をもてなすなど根っからのハッピーパーソンです。お話からはポジティブな意思がビシビシ伝わってきます。「湘南ビジョン研究会」にも賛同していただき、今後はメンバーとして活動をともにしてくださることになりました。

キックオフミーティング4月14日に決定

「湘南都市構想2022」

「湘南ビジョン研究会」は、10年後の湘南地域のまちづくりビジョン「湘南都市構想2022」の作成と、ビーチの国際環境基準「ブルーフラッグ」の認証取得を目標として掲げ活動しています。

◆湘南都市構想2022

分野ごとの分科会を毎月1回開催へ

湘南地域には、海岸ごみ、津波・放射能等の防災対策、観光産業と漁業の振興、海岸の侵食、海洋・河川汚染、不法投棄、防犯・治安、交通渋滞、環境教育など様々な課題があります。これらは対処療法治的な対応策では根本的な解決することができません。今、湘南地域に求められているのは総合的なビジョンです。

「湘南ビジョン研究会」では4月14日(土)にキックオフミーティングを開催し、いよいよ「湘南都市構想2022」

湘南都市構想2022体系図(案)



の策定作業をスタートさせます。「スポーツ・教育」「観光・産業」「福祉・医療」「防災・交通」等の分野別の分科会ごとに、10月まで月1回程度の会議を開催していきます。11月には最終案を取りまとめ、その後、様々なメディアを通して発信していきたいと思っています。

「湘南都市構想2022」の特長は①「行政」都合ではなく「市民」主導、②「画一的」ではなく「湘南の特性」を前面に、③「各自治体単独」ではなく湘南地域の自治体が連携できる「広域性」

重視。この3点を併せ持つ地域ビジョンを目指します。みんなで自由に話し合いながら作っていきますので、参加してみたいと思う方はぜひご連絡ください。

<ブルーフラッグとは>
国際環境教育基金F E Eが認証するビーチやマリーナのエコラベルです。水質や環境教育、安全性などの厳しい基準をクリアしなければならず、その分世界各国で観光客誘致の指針として広く認知されています。「湘南ビジョン研究会」ではアジアで最初の認証取得を目指しています。

◆ブルーフラッグ取得への道

仮申請に向け、書類作成中

現地調査した逗子、腰越、片瀬東浜&西浜、サザンビーチ各ビーチの個別評価を進めるとともに、現在は仮申請に向けた書類を作成中です。

海洋再生エネルギー

原子力に代わる発電手段を求めて…
海は大きな可能性を秘めています

東日本大震災から1年。日本は原子力発電に変わる再生可能エネルギーの必要性を、強く迫られました。太陽光、地熱、バイオマスなど数多くある自然の力を利用した持続可能なエネルギー。湘南ビジョン研究会がテーマとする「海」もまた、大きな力を持っています。しかし、2007年に海洋基本法が制定され、海洋基本計画や海洋エネルギー・鉱物資源開発計画が策定されてきた我が国も、欧米諸国と比べれば遅れをとっているのが現実です。

海洋再生エネルギーの利用研究はイギリスを中心とする欧州から始まり、ベンチャーを中心とする企業は今や100社以上に上ります。韓国、中国でも国家規模のプロジェクトが実施されている一方、日本はここ2、3年でようやく準備が始まった段階であり、実用化技術で10年の遅れをとっています。北海道・瀬棚町で稼動している洋上風力を始め、波力、潮流・海流、温度差などは多くの可能性を秘めています。海洋国家・日本だからこそ取り組むべき海洋再生エネルギー政策。今後、湘南ビジョン研究会でも勉強していきたいと考えています。

海の法律を
学ぼう

広告募集

「読む湘南」は皆様のサポートを必要としています。より良いものを創るために、「広告掲載」という形でご支援いただけないでしょうか。全面から1/8サイズまで、用途に応じて変形も掲載可能です。「協賛」として活動をご賛同いただける方

も募集します。

個人、企業は問いません。ロゴ等の使用もOKです。下記アドレスまでメールにてお問い合わせ下さい。よろしくお願いします。また各月のミニフォーラムへの参加申し込みも同アドレスにご連絡下さい。

✉shonan_vision@hotmail.co.jp 担当：窪田

◆ 美味しい湘南

藤沢四季菜・炭火Dining 樂

藤沢駅南口から歩いて3分。人通りの多いファミリー通りからほんの少し脇にそれただけで、フッと空気が緩む。そんな路地のビル3階に「樂」はある。まさに「駅から近い隠れ家」だ。串焼きの焼き場に立つ店長の松本憲兒さん(35)が「いらっしゃ~い」と柔らかな声で迎えてくれる。

「まずは串焼きを食べてほしいですね。炭火Diningなので。あとは地物中心に仕入れている刺身かな」

松本さん一押しの焼き鳥は岩手県産「奥の都どり」。自然豊かな環境で育てられ、癖のないジューシーな肉質が特徴だ。

「オープン当初から5年近くずっとこの鶏を使っていて、今でもしみじみ『この鶏うまいなあ』って思います。焼いても煮ても揚げてもうまい。唐揚げにもとても合いますね。噛んだ瞬間、ジュワッと。たまなんですね(笑)」

刺身用の魚は主に三崎の漁師から直接仕入れている。

「例えば昼の11時に漁師さんに『何ある?』って電話

するでしょ? そうすると2時間後には直接届けてくれる。向こうでバッと絞めて、まだトロ箱の中で“生きている”状態で店に来ます。以前は都内のお店でも

働いていたけど、藤沢という土地のこの距離感はとても贅沢だと思いますね」

人気の焼酎はメニューに記載のないものも含め、約60種類がそろう。

「いろいろおいしい焼酎を

そろえたいけど、プレミア価格では絶対仕入れない。1杯1500円とか2000円とか。焼酎ってそういうお酒じゃないですからね。600円、せめて700円くらいでおいしいものを楽しんでください。今は芋焼酎の『始良(あいら)』がおすすめ。この辺

樂



美味しかったって言われるのが、やっぱり一番うれしい。だから美味しかったら『美味しかった』ってちゃんと言ってくださいね(笑)

焼き鳥の盛り合わせ
じゃこと岩のりのサラダ
岩手・都どりの唐揚げ
刺身盛り合わせ
(初がつお、ぶり、飛び魚)
茄子と豆腐の揚げ出し

ではあまり置いてないんじゃないかな?」

開店から今年で丸5年。お客様との信頼関係を、ゆっくりとだが確実に築いてきた。

「お任せって言われるとうれしいですよね。やりがいを感じます。ありがたいことに週3回、4回と来てくださる方もいるんですが、3回、4回ともお任せだったりしてね。これはもう大変ですよ。同じもの出すわけにいかないですから」

宴会のメニューも決めていない。その日その日、入荷した食材やお客様の年齢層、リピーターか否かでメニューを決めていくという。



「どうやって喜んでもらおうかなーって。食材見てメニューを考えている時は楽しいですね。コースは飲み放題で3500円からですが、学生さんだったらもっと安くとか、いっぱい食べたいの5000円、6000円でとか。おっしゃっていただければ、それに応じるのが僕の仕事です」

最後に一言。

「お客様に美味しかったって言われるのが、やっぱり一番うれしいんですよ。だから美味しかったら『美味しかった』ってちゃんと言ってくださいね(笑)」

筆者自身たびたび利用させてもらっている「樂」。何を食べても本当にうまい!さらに特筆すべきはランチのコストパフォーマンス。唐揚げやチキンカツの定食、ハヤシライスなどがワンコインの500円で食べられる。まずはランチで雰囲気を確かめて、次に夜にお酒でも、というのも良いかもしれない。

営業時間 11:30~14:00

月~木 18:00~3:00

金・土 18:00~5:00

毎週日曜日休

藤沢市鵠沼石上1-4-2 藤沢D2ビル3階

T E L 0466-50-7607